安定性条件

大阪大学大学院理学研究科数学専攻 山本 雄大

目次

1	三角圏の公理	1
2	t-structure	3
3	安定性条件	3
4	安定性条件の空間	7

1 三角圏の公理

定義 1.1. 圏 \mathcal{C} が前加法圏 (preadditive category) とは、以下を満たす場合である.

- (i) 任意の $E, F \in \mathcal{C}$ に対して、 $\operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(E, F)$ が Abel 群になる.
- (ii) 任意の $E, F, G \in \mathcal{C}$ に対して,

$$\begin{array}{cccc} \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(F,G) \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(E,F) & \longrightarrow & \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(E,G) \\ & & & & \cup \\ & (g,f) & \longmapsto & g \circ f \end{array}$$

が双線型である. つまり、任意の $g, g' \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(F, G), f, f' \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(E, F)$ に対して、

$$(1) (g+g') \circ f = g \circ f + g' \circ f$$

$$g \circ (f + f') = g \circ f + g \circ f'$$

が成り立つ.

定義 1.2. 前加法圏 C が加法圏 (additive category) であるとは、

- (i) 零対象 (始対象かつ終対象) である $0 \in \mathcal{C}$ をを持つ.
- (ii) 任意の対象 $E, F \in \mathcal{C}$ に対し直和 $E \oplus F$ が存在する.

定義 1.3. 加法圏 D がアーベル圏であるとは

定義 1.4. $\mathcal D$ を加法圏,[1] を自己同値函手とする.完全三角形と呼ばれる $\mathcal D$ における三角形の集合を備えた,以下の性質をみたす組 $(\mathcal D,[1])$ を三角圏と呼ぶ

(i) 任意の $E \in \mathcal{D}$ に対して,

$$E \xrightarrow{\mathrm{id}_E} E \to 0 \to E[1]$$

は完全三角形.

上の可換図式において、f,g,h が同型で $E_1\to E_2\to E_3\to E_1$ [1] が完全三角形なら $F_1\to F_2\to F_3\to F_1$ [1] も完全三角形

(iii) 任意の $E \xrightarrow{f} F$ は

$$E \xrightarrow{f} F \to G \to E[1]$$

と完全三角形に拡張できる.

(iv)

$$E_1 \xrightarrow{u} E_2 \xrightarrow{v} E_3 \xrightarrow{w} E_1[1]$$

が完全三角形であることと

$$E_2 \xrightarrow{v} E_3 \xrightarrow{w} E_1 \xrightarrow{-u[1]} E_2[1]$$

が完全三角形であることが同値.

(v)

2 つの完全三角形と図式を可換にする f,g が存在したとき、すべての四角形を可換にする h が存在する.

(vi) 八面体公理

上記の 3 つの完全三角形に対して,以下の図式のすべての四角形を可換にし,4 行目を完全三角形にするような $u\in \mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(X,Y), v\in \mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(Y,Z), w\in \mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(Z,X[1])$ が存在する.

2 t-structure

定義 2.1. \mathcal{D} を三角圏. 充満部分三角圏 $\mathcal{D}^{\leq 0}, \mathcal{D}^{\geq 0} \subset \mathcal{D}$ が次の条件を満たすとき, $(\mathcal{D}^{\leq 0}, \mathcal{D}^{\geq 0})$ を \mathcal{D} の t-構造 と呼ぶ. $\mathcal{D}^{\leq n} := \mathcal{D}^{\leq 0}[-n]$, $\mathcal{D}^{\geq n} := \mathcal{D}^{\geq 0}[-n]$

- (i) $\mathcal{D}^{\leq 0} \subset \mathcal{D}^{\leq 1}$ $\mathcal{D}^{\geq 1} \subset \mathcal{D}^{\geq 0}$
- (ii) $\mathcal{D}^{\geq 1} \subset (\mathcal{D}^{\leq 0})^{\perp}$

つまり、 $\forall E \in \mathcal{D}^{\leq 0}, \ \forall F \in \mathcal{D}^{\geq 1}, \ \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(E, F) = 0$

(iii) 任意の $E \in \mathcal{D}$ に対して

$$\tau_{<0}E \to E \to \tau_{>1}E \to \tau_{<0}E[1]$$

となるような $\tau_{\leq 0}E \in \mathcal{D}, \ \tau_{\geq 1}E \in \mathcal{D}^{\geq 1}$ が存在する.

補題 **2.2.** (i) $\mathcal{D}^{\geq 1} = (\mathcal{D}^{\leq 0})^{\perp}$

(ii) E に対して、 $\tau_{<0}E$, $\tau_{>1}E$ は同型を除いて一意に定まる.

証明. $E \in (\mathcal{D}^{\leq 0})^{\perp}$ を任意にとる. 定義より以下の完全三角形がとれる.

$$\tau_{\le 0}E \to E \to \tau_{\ge 1}E \to \tau_{\le 0}E[1]$$

定義より、 $\tau_{\leq 0}E \to E$ は 0 射であるので、 $\tau_{\geq 1}E \simeq E \oplus \tau_{\leq 0}E[1] \in \mathcal{D}^{\geq 1}$ →直和因子を取る操作で閉じている? 一意性は半直交分解と同じ.

補題 2.3. \mathcal{D} を三角圏, $A \subset \mathcal{D}$ を充満部分加法圏としたとき, A 有界な t-構造 $\mathcal{F} \subset \mathcal{D}$ の核であることと以下 の条件が同値.

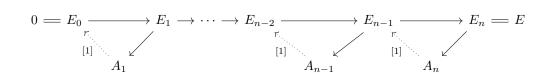
i. 任意の $k_1, k_2 \in \mathbb{Z}$ $(k_1 > k_2)$ と $A, B \in \mathcal{A}$ に対して, $\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(A[k_1], B[k_2]) = 0$

ii. 任意の対象 $E \in \mathcal{D}$ に対して、有限の整数の列

$$k_1 > k_2 \cdots > k_n$$

が存在して $A_i \in A[k_i]$ となるような分解が存在する.

証明.



3 安定性条件

定義 3.1. [B1] Abel 圏 *A* 上の安定性条件とは群準同型

$$Z \colon K(\mathcal{A}) \to \mathbb{C}$$

で以下を満たすもの

- (i) $\forall E(\neq 0) \in \mathcal{A}, Z(E) \in \mathbb{H} := \{ re^{i\pi\phi} \mid r > 0, 0 < \phi \leq 1 \}$
- (ii) 任意の $E \in A$ に対して HN フィルトレーションが存在する.

$$0 = E_0 \subset E_1 \subset \cdots \subset E_k = E$$

で各 $F_i = E_i/E_{i-1}$ が Z について Z-半安定.

 $E(\neq 0)$ が Z-半安定とは任意の部分対象 $0 \neq F \subsetneq E$ に対して, $\arg Z(F) \leq \arg Z(E)$ ここで,

$$\phi(E) := \frac{1}{\pi} \arg Z(E) \in (0, 1]$$

と定める.

補題 3.2. $E,F\in\mathcal{D}$ が半安定で $\phi(E)>\phi(F)$ とき,

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(E, F) = 0$$

証明. $f \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(E, F)$ が 0 でないと仮定する.

$$0 \to \operatorname{Ker} f \to E \to \operatorname{Im} f \to 0$$

の完全列が存在して E が半安定対象であることから $\phi(\operatorname{Im} f) \geq \phi(E)$. $\operatorname{Im} f \neq 0$ が F の部分対象で F も半安定であることから $\phi(F) \geq \phi(\operatorname{Im} f)$. これらを合わせると $\phi(F) \geq \phi(E)$. 仮定に矛盾.

補題 3.3. [B1] A: アーベル圏,群準同型 Z: $K(A) \to \mathbb{C}$ が次の条件を満たすとき,HN フィルトレーション が存在する. つまり Z が安定性条件を定める.

(i) 全射の無限列

$$E_1 \twoheadrightarrow E_2 \twoheadrightarrow E_3 \twoheadrightarrow \cdots$$

で $\phi(E_i) > \phi(E_{i+1})$ となるものは存在しない.

(ii) 無限降下列

$$E_1 \supset E_2 \supset E_3 \supset \cdots$$

で $\phi(E_{i+1}) > \phi(E_i)$ となるものは存在しない.

証明.

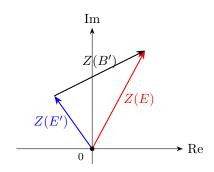
Step 1

- •任意の対象 $E \in A$ には $\phi(A) \ge \phi(E)$ を満たす半安定な部分対象 A が存在する.
- •任意の対象 $E \in A$ には $\phi(E) \ge \phi(B)$ を満たす半安定な対象 B と全射 $E \rightarrow B$ が存在する.

E が半安定なら OK. そうでないなら $\phi(E') > \phi(E)$ となる部分対象 $E'(\subsetneq E)$ がとれる.

これが無限回繰り返されると条件の (ii) に矛盾するので有限回でとまる.この極小となる A をとれば半安定である.

同様に E が半安定なら全射 $E \xrightarrow{\mathrm{id}} E$ がとれて OK. そうでないとき, $E'(\subsetneq E)$ で, $\phi(E') > \phi(E)$ が存在して, $B' \coloneqq E/E'$ と定めると $\phi(E) \ge \phi(B')$ であり, $E \twoheadrightarrow E/E'$ がとれて,有限回でこの操作はとまるのでいずれ半安定になる.



Step 2

 $E \rightarrow B$ が次の条件をみたすとき mdg と呼ぶ.

- $\bullet \phi(E) \ge \phi(B)$
- ●任意の $E \rightarrow B'$ に対して、 $\phi(B') \ge \phi(B)$ であり、 $\phi(B') = \phi(B)$ なら

$$E \twoheadrightarrow B \twoheadrightarrow B'$$

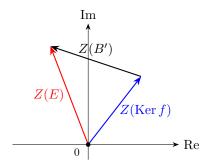
と分解.

任意の対象 E は mdq を持つ.

 $E \to B'$ において B' が半安定でないなら Step 1 から半安定な対象 B'' で $\phi(B') > \phi(B'')$ と $B' \to B''$ がとれるので,B' が半安定なときについて示せばよい.同様に mdq の B は半安定でなければならない. E が半安定対象のとき,任意の全射 $E \to B'$ に対して,短完全列

$$0 \to \operatorname{Ker} f \to E \xrightarrow{f} B' \to 0$$

が存在するので $Z(B') = Z(E) - Z(\operatorname{Ker} f)$. 安定対象なので, $\phi(\operatorname{Ker} f) \leq \phi(E)$



したがって、 $\phi(B') \ge \phi(E)$ となり E が半安定対象のとき、 $E \xrightarrow{\mathrm{id}} E$ は mdq となる. そうでないとき、step1 より $\phi(A) > \phi(E)$ なる半安定対象 $A \subsetneq E$ と

$$0 \to A \to E \to E' \to 0$$

という完全列が存在する. $\phi(A)>\phi(E)>\phi(E')$ となっている. $E'\to B$ が E' の mdq となっているとき,合成 $E\to B$ は E の mdq であることを示す.

 $::E \rightarrow B'$ を半安定で $\phi(B') \leq \phi(B)$ となっているとすると

$$\phi(A) > \phi(E) > \phi(E') \ge \phi(B) \ge \phi(B')$$

A, B' は半安定対象であり、前の補題より $\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(A, B') = 0$

$$A \xrightarrow{\bullet} E \xrightarrow{\longrightarrow} E/A = E'$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

$$B'$$

図式のように可換にする全射が普遍性から存在する. $E' \twoheadrightarrow B$ が mdq なので $\mu(B') = \mu(B)$ となり、mdq の条件より $E' \twoheadrightarrow B \twoheadrightarrow B'$ と経由する. したがって $E \twoheadrightarrow B \twoheadrightarrow B'$ が存在し、 $E \twoheadrightarrow B$ が mdq であることがわかる.

E' が mdq でない場合は E を E' に取り替えて議論を繰り返すことと条件 (ii) から有限回でとまるので mdq の存在がわかる.

Step 3

任意の $E \in \mathcal{A}$ は HN フィルトレーションをもつ.

0 でない $E \in \mathcal{A}$ を任意にとる. E が半安定なら $0 \subset E$ が HN フィルトレーションを与えている. そうでない とき, $E \twoheadrightarrow B^1$ を mdg として

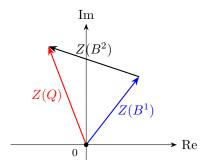
$$0 \to E^1 \to E \to B^1 \to 0$$

をとる. E^1 が半安定であるなら $0 \subsetneq E^1 \subsetneq E$ が HN フィルトレーションになっている. $(E/E^1 \simeq B$ で mdq の B が半安定であるため). E^1 が mdq でないとき, $E^1 \twoheadrightarrow B^2$ を mdq として

$$0 \to E^2 \to E^1 \to B^2 \to 0$$

 $Q=E/E^2$ とすると, $E \to B^1$ が mdq であることから $\phi(Q) \geq \phi(B^1)$ であり,次の短完全列

$$0 \to B^2 \to Q \to B^1 \to 0$$



から $\phi(B^2) \geq \phi(Q)$ が得られる. $\phi(B^2) = \phi(Q) = \phi(B^1)$ と仮定すると, $E \twoheadrightarrow B^1$ が mdq であることから $E \twoheadrightarrow B^1 \twoheadrightarrow Q$ となって, B^1 と Q の双方向に全射があることから $B^1 \simeq Q$ となり, $B^2 = 0$. これは矛盾. したがって, $\phi(B^2) > \phi(B^1)$ が成り立つ.この操作は条件 (ii) より有限回でとまり,その商は半安定なので HN フィルトレーションを得る.

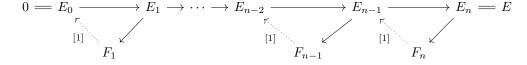
定義 3.4. \mathcal{D} : 三角圏. \mathcal{D} 上の安定性条件とは, \mathcal{D} の有界な t-構造の t-構造の t-構造の t-構造の t-構造の t-構造の t-構造の t-

$$Z \colon K(\mathcal{D}) = K(\mathcal{A}) \to \mathbb{C}$$

(Z, A) のことである.

定義 3.5. 三角圏 $\mathcal D$ におけるスライスとは部分圏の族 $\{\mathcal P(\phi)\}_{\phi\in\mathbb R}\subset\mathcal D$ で次の条件を満たすもの

- $\bullet \forall \phi \in \mathbb{R}, \mathcal{P}(\phi + 1) = \mathcal{P}(\phi)[1]$
- $\bullet \phi_1 > \phi_2$ で $E_i \in \mathcal{P}(\phi_i)$ ならば $\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(E_1, E_2) = 0$
- •任意の対象 $E \in \mathcal{D}$ に対して,実数列 $\phi_1 > \phi_2 > \cdots > \phi_n$ と



 $F_i \in \mathcal{P}(\phi_i)$

補題 3.6. \mathcal{D} に安定性条件 $(\mathcal{D}$ 上の有界な t-構造と stability 函数 Z) をあたえることと, \mathcal{D} 上のスライス \mathcal{P} と 群準同型 Z: $K(\mathcal{D}) \to \mathbb{C}$ の組 (Z,\mathcal{P}) で,任意の $\phi \in \mathbb{R}$ と $0 \neq E \in \mathcal{P}(\phi)$ に対して $Z(E) \in \mathbb{R}_{>0}e^{i\pi\phi}$ を与えることは同値.

証明. 安定性条件 $(Z, A) \rightarrow$ スライス \mathcal{P} の構成 各 $0 < \phi \le 1$ に対して,

$$\mathcal{P}(\phi) := \{ E \in \mathcal{A} \mid E \colon Z - \# \text{gr} \ Z(E) \in \mathbb{R}_{>0} e^{i\pi\phi} \} \cup \{0\}$$

 $\phi \in \mathbb{R}, \phi \in (k, k+1]$ となる整数 k をとって

$$\mathcal{P}(\phi) := \mathcal{P}(\phi - k)[k]$$

こう定めたとき, スライスになっていることを確かめる.

- $\bullet \forall \phi \in \mathbb{R}, \mathcal{P}(\phi+1) = \mathcal{P}(\phi)[1]$ は定義から従う.

このとき $F_1, F_2 \in \mathcal{P}((0,1])$ を用いて、 $E_1 = F_1[m]$ 、 $E_2 = F_2[n]$ 、(m > nまたは $m = n, \phi(F_1) > \phi(F_2)$)とかける.

m=n のときは補題より 0 であることがわかる. m>n のとき $\mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(F_1[m],F_2[n])\simeq \mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(F_1,F_2[-(m-n)])$ なので, $\mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(F_1,F_2[-k])=0$ k>0 を示せばよいが, $F_1\in\mathcal{D}^{\leq 0}$, $F_2[-k]\in\mathcal{D}^{\geq k}$ なので t-構造の定義より 0 となることがわかる.

分解をもつことは t-構造の性質より、整数の列

$$k_1 > k_2 \cdots > k_n$$

と分解

$$0 = E_0 \xrightarrow{r} E_1 \to \cdots \to E_{n-2} \xrightarrow{r} E_{n-1} \xrightarrow{r} E_n = E$$

$$A_1[k_1] \qquad A_{n-1}[k_{n-1}] \qquad A_n[k_n]$$

 $A_j \in \mathcal{A}$ が存在する. 各 A_j には仮定より HN フィルトレーションが存在するので更に分解することで 3 つ目 の条件が得られる.

逆に \mathcal{P} が与えられたとき, $\mathcal{F}^{\perp}[1] = \mathcal{D}^{\geq 0} \coloneqq \mathcal{P}((0,\infty)), \mathcal{F} = \mathcal{D}^{\leq 0} \coloneqq \mathcal{P}((-\infty,1])$ が t-構造を定める.スライスの条件より,

4 安定性条件の空間

定義 4.1. Slice(\mathcal{D}) を \mathcal{D} 上のスライスの集合, \mathcal{P} , $\mathcal{Q} \in \operatorname{Slice}\mathcal{D}$ に対して,

$$d(\mathcal{P}, \mathcal{Q}) \coloneqq \sup_{0 \neq E \in \mathcal{D}} \{ |\phi_{\mathcal{P}}^{-}(E) - \phi_{\mathcal{Q}}^{-}(E)|, |\phi_{\mathcal{P}}^{+}(E) - \phi_{\mathcal{Q}}^{+}(E)| \}$$

と定義する. 距離空間の公理を満たす.

補題 **4.2.** $\phi_*^+(E), \phi_*^-(E)$: Slice(\mathcal{D}) $\to \mathbb{R}$ は連続写像である.

参考文献

[B1] Bridgeland, Tom, Stability conditions on triangulated categories, Annals of Mathematics, Vol. 166, No. 2, 2007, pp. 317 – 345.